

「エマオへの道・四国」第一次派遣報告

上島一高（今治教会）

初めに

6月の終わり、有志間の電話によって動きが始まった「エマオへの道・四国—東日本大震災救援ボランティアを送る会」は、7月初めに有志の会立ち上げの準備に入り、7月24日に、ちょうど牧師就任式が開かれた松山教会を会場にお借りして、初の会合を開いた。会の名前決めにも時間をかけ、「共に歩いておられる主」を見出す旅が始まった。

そこで確認された会の目標の第一は、ボランティア派遣された者が現地を肌で感じてくるところを通して、すでに四国教区や、四国の各教会（関係団体）・個人で行われている教団等への献金が、さらに気持ちの通った、具体的なものになることであった。

遠い四国からボランティアを派遣することには、多額の費用がかかる。有志たちは、その費用を現地への献金に振り向けたほうがいいという思いを持ちつつも、なお、代表を派遣することを通して神さまが実現してくださることの大きさに賭けてみようとしたのである。

◆わたし自身がそのような思いを持ったのは、実体験を通してだ。新潟教会（新潟市）在任中、2004年に、7月の新潟・福島豪雨水害で、三条教会（当時、わたしは代務者；新潟地区長）をボランティア宿泊・派遣・情報発信拠点として、全国からボランティアに来ていただき、励ましを受けた。

さらに、10月の新潟県中越地震で、（南北に活動を分かつなかで、わたし自身は、主に北の長岡市・聖公会聖ルカ教会でのオープン・スペースに関わるのだが）南の十日町教会では、教会を市のボランティア拠点、またボランティア宿泊場所として被災支援センター活動を展開し、全国から教会内外の多くのボランティアに来ていただき、励まされた。

各教区、教会、学校、一般のボランティアの方々、また、職能を持つYMCAの方々は、来て寄り添ってくださると共に、それを持ち帰って、具体的、また精神的により深い支援へとつなげてくださった。2007年7月の新潟県中越沖地震では、被災支援実務委員長として、同様な経験をしている。それは、お金に換算できないものである。

また、今回現地でお会いした小西望牧師（東北教区副議長）、片岡謁也牧師（同宣教部委員長）は、新潟を訪ねてくださった方々であるし、ジェフリー・メンセンディーク師（仙台青年学生センター主事）は、新潟の状況を東北教区総会に伝えにうかがった際に親しく出合わせていただいた方である。ちなみに、今回同道した広瀬さんは、YMCA職員から牧師となられた方だが、新潟の被災地にボランティアに来てくださって知り合っている。

◆今回の有志の一人がこう言われたことを思い出す。現地で言われているのは、『モノよりつながり、作業より笑顔』だそうですよ。わたしたちは、5泊6日のボランティアを通して、その言葉通りであることを知ることになる。

1日目 8月25日(木)

今治を6時に出発して、松山空港へ。大阪発の第一便に乗るべく、手荷物検査をしてゲートへ。今回のボランティア派遣メンバーの広瀬満和牧師(三津教会)と合流、機内へ入る。伊丹空港でさらに高知からの成田信義牧師(土佐教会)と合流。もう一人の岡田真希伝道師(丸亀教会)は、新幹線ゆえ、現地合流予定。

飛行機は一端着陸寸前までいったが厚い雲に阻まれ再上昇。40分上空待機の後、再進入して着陸。低い雲を抜けた後の短い時間に窓外に被災地を見る。空港バスに乗り込み、さらに、東部道路の左右の風景の違いを見ながら町に入る。所々、屋根瓦の損傷がみられ、ブルーシートで応急処置がされている。古い建物にはクラックが入っているが、新しいものは大丈夫そうに見えた。

◆東北教区センター・エマオ着。まず、一階におられる職員にあいさつ。奥にいる、ジョフリー・メンセンディーク主事と再会する。前回は、新潟県中越地震の支援感謝・報告・要請のため、東北教区総会におじゃました時に親しくお話しさせていただいたが、6年も前のこと。覚えて下さっていたことに驚いた。

その後、2階の被災支援センターへ。ここで、スタッフによるオリエンテーションを受ける。開始以来のべ1000人のボランティアに対し、毎回同じ説明を繰り返しているはずなのに、倦まず弛まず誠実になされる手引きに感銘を受ける。ここで受けた説明は、後で実際の場面で反芻することにより、簡にして要を得た手引きであることを実感した。

持ち物で、厚底靴(しかも側溝のヘドロ出しや、砂、土が入るのを避けるため、長靴のそれ)が要るなどはここで意識する。もっともこれは予め知っておくとよかった。センターの使い方や、近隣への配慮、教会など宿泊先への配慮。わたしは、厚底靴は履いていたものの、長靴のそれは用意しておらず、これからの仕事についての想像力の欠如を恥じた。

ことほど左様に、いい加減な心構えでやってきたわたしは、ボランティア保険への加入についても軽く考えていた。「生命保険にも入っているし、と」。前任地新潟で災害ボランティア受け入れをした際には、ボランティアを送り出す側だったが、「はいつておくといい」、「はいつておくものだ」と、入るべき理由をあまり考えていなかった。

しかし、入るべき理由の第一が、自分が「他の人々に被害を与えてしまった時の賠償」にあることを知って、愕然とした。だから、エマオでは保険に入っていない人を前線に送ることはないということだった。幸い、近くにある県庁横の自治会館にある社協で、登録をすることができ、翌日からのボランティアに参加する準備が整った。

*ボランティア保険とは(「ボランティア活動保険」案内文書より引用)

- ①ボランティア自身がケガをした。
 - ②ボランティア自身が活動の対象者等の身体や財物に損害を与えた結果、法律上の賠償責任が発生し賠償金を払うことになった。
- ①、②の保障をセットにした保険(団体構成員の相互扶助や親睦を主目的とする活動は対象外)です。

◆社協での保険加入を終えてエマオに戻ると、広瀬さんが、エマオの主事であるメンセンディークさんから、これまでの経緯を聴き取っていた。途中からわたしも同席させていだいて、耳を傾けた。その概要は、7月4日付の『エマオ通信』の一面、松本芳哉（エマオ館長代行）筆「被災者支援センター in エマオ」に記されているところでも補完できる。

メンセンディークさんは、センターでの活動の初動を手助けした人々のことを挙げて感謝しておられた。阪神淡路大震災、新潟県中越地震を経験した人々、教区（地区）が、どれほどすばやく現地に入って、ニーズ（特にガソリン）を満たしてくれたか、それがどれほど励ましとなったか。出てくる名前には、一年半ほど前まで新潟にいたわたしには馴染みの、新井純（十日町教会牧師）、長倉望（新潟教会牧師）、西川幸作（三条教会牧師）、柴田信也（兵庫教区被災者生活支援長田センター主事）があった。

特に長倉さん（新潟教会のわたしの後任）が、震災直後、3～4回ほど、新潟～仙台間を往復していること、また、当初、新潟教会が全国からの物資集積場所としての役割を担ったことは知っていた。かつては被災者側であった新潟地区の働きが、物資・訪問を受けられた当事者から（後で、現・被災支援センター長の高田恵嗣牧師＝仙台川平教会からも）喜ばれていることを直にうかがえたことは感激だった。

さて、メンセンディークさんによれば、最初は、1階の仙台青年学生センターの働きを休止して、全館挙げての被災支援をとっていた。宿泊もエマオが中心。5月末からは、支援センターとしての活動は続けつつ、宿泊を他に頼みながら、エマオの日常活動も取り戻して、現在に至っている。

その際、支援センターの方向づけでは議論があったという。最終的に、①持続可能な活動、②シェアリング可能な人数（30名以内→夏休みに入ってから50名近くになっている）、③次の被災の場でも生かされる活動ということ意識していくこととなった。わたし自身は、初期の活動を経験していないが、その後のエマオのセンターを通してなされる実際のボランティア派遣を通して、効率を求めるのではなく、「出会い」「寄り添い」を重視し、シェアしながら気付きあう（作業の方法だけでなく、人間が生きることの機微も）ことを大切にする活動が実現されていることを実感した。

メンセンディークさんは、そんなボランティア活動の現場を「共同体再生の最前線」と表現された。被災をし、共同体が壊された現場で起きていることの中で、再生に向けた共同体の意義が生き生きと想起されているというのは、困難の中に与えられた希望だと、思わされた。

実は、エマオを拠点とするボランティア活動は、津波を受けた仙台市若林区荒浜の七郷に自転車何度か通って、地域のひととの信頼関係を築いた人によって始まった。アップダウンのある片道14キロメートルの道のりを辿りながら、新しいボランティアたちは、自動車の使えなかった初期の状況を追体験しつつ、文字通り何度も足を運んで関係づくりをしてきた先輩たちの業を繰り返しているのである。何度もそれが語られ、再話されていくことによって、それらはエマオにおける「一つの大切な物語」になる（聖書の物語もそのよ

うにして成った通り)。

◆ワークから自転車部隊が三々五々、元気よく帰ってくる。しばらくすると、ミーティング(報告会)が行われて、これが次の日の作業振り分けの元になる。ミーティングの終わりに、その日のワークで最後になる人の挨拶がなされ、わたしたち、これから加わるの人の自己紹介がなされた。

続いて、二手に分かれて、ボランティア体験のシェアリングが始まる(その細かい内容は外部には漏らさないという約束で)。すでに何日か経験しているワーカーがリーダーとなり、名前を名乗り合ったのち、「今日心に残ったこと」「感謝したいこと」について語った。わたしは、そのまえの報告会で、送り出し迎える姿を見ながら、「ここでは、生きた働きが、去る人から来る人へとつながって行っており、感銘した」と語った。

お互い、見知らぬものが、新しいことを共に経験する。共通にしていることながら、これまで経験したことのないことを言葉にしようとしている。友の口から出る、安易には予測できない言葉を、キャッチしようとするメンバーたち。そこには全身をアンテナにした緊張感が漲る。また、どんな経験であっても、相手の経験を尊重して、受け容れようとしている。

◆後で気づいたことだが、各地から集まってきた老若男女は、肩書抜きで出会い、新しい友を創る体験をする。それが苦手な人々もいるが、周りの人々が結んでいく姿から学ぶ。時には羨望の気持ちを持ちながらも、受け入れてくれる人々によって、結ばれて行く。日頃、幼稚園児が経験していることと、実は同じである。それは決して「幼稚」なのではなく、人間にとって原初的な、根源的な体験だ。

牧師同士、教会員同士、双方間も、関係が深まっていない者同士で、何か共通の体験をし、開かれて行く必要がある。固定され、淀んだ関係にならないように。尤も、新しい体験をする際には少なからずエネルギーがいる。少々しんどいものだ。どきどきもする。でも、それを避けては新しい「結び」は生まれない。

この洞察は、伝道(ミッション)というものの本質につながっているような気がする。イエスと出会った人々の戸惑い。戸惑いながら、それを超えて、自分の殻を破らせていた人々、戸惑い続けることを拒んで、もとの自分の土俵のうちに戻ろうとする人々。

今回のボランティアたちは、実際に、そこで聖書に出会おうとしたり、宿泊施設等の教会に出席して何かを感じ取ろうとしたりしていた。新潟県中越地震の際に、十日町でなされた連夜の祈祷会も、定例(週1)の祈祷会を超えて、非-キリスト者青年たちの求めによって続けられた。

かつて教会が行っていた(し、今もなされている)修養会、KKS、キャンプなどでも、テーマについて語り合うスタイルがある。しかし、しばしば観念的なものに終わったり、互いのものをシェアしきれなかったりする弱点がある。今回のエマオのシェアリングは、共通の殻を破られるような他者との出会い、事柄との出会いをした個々人によってなされるシェアリングであるから、深い。福音の生きた現場に触れるからこそ、深い。

もっとも、この熱さや深さは、現実と直面するとき、一過性で終わらせない、一時の熱で終わらせない工夫や、痛みを伴う（エマオ自身が経験したように）試行錯誤が必要である。教会でリバイバル的なものを求める動きと、これに対して自制する動きとが存在するのがよくわかる。同志社＝組合教会でも、その伝道の経緯の中では、そうであった。わたしたちは、どちらかを選んで、どちらかを切り捨ててしまうことのないようでありたい。

青年伝道として、各キリスト教主義学校が勧めている青年のボランティア体験は、きわめて重要な意義を持つものと思われる。ただし、青年を教会に取り込むためだけでなく、青年が福音の喜ばしい現実に触れるために。

2日目 8月26日（金）

朝のミーティング・希望調査で石巻行きを選ぶ（最初は意外と希望者が出なかった）。幹線道路、高速道路共に、応急処置はされているものの、中越地震の時同様、でこぼこがあり、車は時折きしみながら進む。

三陸道を石巻港 IC で降りて、行き先を確定すると、いよいよ津波被災地域に入る。それまでの風景とは様変わりして、解体されずに残っている家も多く、それらの 1 階部分は津波によってぶち抜かれており、傾いている家もあった。いずれも最低限の応急処置がなされているか、放置されている。動き始めている工場やコンビニ周辺以外に人影は見えない。道路整備や最低限の漂着物の撤去はされていても、ほとんど手つかずの状態に見える。それが延々と続き、呆然とさせられる。

◆リーダーの K さん（3 か月ごとで農業の季節労働をして全国を移動中、被災支援を思い立ち仙台へ）の案内で、ガレキ撤去へ。彼女は、外連味なく、さわやかに、地域の人々とのつながりをもちながらコーディネートを果たす。「かつこいい」。

仕事そのものは、解体後の敷地に残存する余土に生い茂る雑草抜き。実は、ガレキの土山であり、草を抜くべく鍬を振るたびに、器やプラスチックや MD や金属、本、書類などが掘り起こされる。「かつて柏崎で経験したガレキ撤去と似ている」と思う。防塵マスクをしているから汗が溜まる。目が細かいので息苦しくもある。しかし、仕事ははかどり、最終的にはもう 1 日もあればというところで終了。

この間、昨日書いた通り、ワーカーは平等なので、若い先輩に導かれつつ共に働く。その楽しさ。われわれ 5 人のチーム（わたし含めて 50 代の男性 3 名、大学生男性 1 名）を率いるのは T さん、石巻チームの K さんなどの姿勢に倣い、よく地域の人々に挨拶する。働くことに懸命になるのではなく、それ以上のものために動く。

帰り道では仮設住宅なども横目に見ながら、若者たちの元気な、ヤンキーなやりとりを聞きながら、また 1 時間半の道のりを帰る。知り合いのいない人々の方が、どんどん知り合っている。出合いを求めて、また楽しみにして出合っている。

◆ワークを終えてセンターに帰り着くと、片岡謁也牧師（教区宣教部委員長）が、教会復興委員会の放射能問題の小委員会を終えて会津に帰るところだった。しばし、福島教会

の状況を教えていただく。TV でよく取り上げられる郡山あたりの子どもたちの、戸外で遊べない現実、会津若松あたりにもあることを知る。新学期に当たり、子どもたちに雑草抜きを求める学校に、お連れ合いたちが抗議をしているということも。あまり影響のない会津の西部でも、農業等は厳しい状況だと言う。

◆エマオに入館して、被災支援センター委員長の高田恵嗣牧師と話す。師は、3月16日からエマオでの働きに関わっておられる。2か月目に方向を模索する中での苦悩の時期を経たエマオの被災支援の責任者になる。

メンセンディーク師と同様、初動の支援への感激を語られた。それは繰り返さないが、関西、新潟からの初動の支援を思い起こすと涙が出ると言う。また、遠いのにボランティアの約半数は関西からだ、とも。

特に、1日目のところで触れた「七郷とつながっていく物語」については、克明に話された。組織的に、合理的に、ぐんぐんと進めるボランティアも必要だが、人とのつながりを見出しながら、地下茎がのびていくようなエマオの働きを嬉しく語られるのだった。

荒浜地区は、より海に近い方が津波に流され、農地を挟んで七郷、また農地を挟んで六郷。この六郷にある七郷小学校が避難所となっており、それより海側でコミュニティが再生しているのはおそらく神屋敷地区のみで、それは一つの奇跡。そこに関われていることを嬉しく思う。117戸のうち57戸までが地域に戻ってきたのだから。

こうして、使徒言行録のように七郷物語が語り継がれる。責任者たちによって、何度も語られていく物語をワーカーたちが聞き、語り継いでいく。再話されるうちに、かけがえない物語となる。そして、その物語の中に次のワーカーたちが入って行く。

一方、と高田師は語られるのだが、相手の気持ちを想像しない、ボランティアや善意は、むしろ相手をしんどくさせる。たとえば、「こういうイベントがやれますよ。場所さえ用意してもらえば無料で」と言われる。でもそれは、他のことはすべて現地（被災者）がやらねばならない。もっとも、長田センターが最近岩手でされたイベントは、地域の人々とつながりつつ、その人々の想いを実現するような祭りで、そのためのサポートもきめ細かい。このようなものでなければならない、と。

3日目 8月27日（土）

七郷物語を聞いた翌朝、七郷に向かう。自転車部隊で走る14キロの道のり。年齢を感じる辛さ。この間、あちこちで道路補修が行われていた。そこには、いつも見慣れた安全監視員が交通整理に立っている。いつも車に乗って同じ場面に遭遇すると、その方々が悪いわけではないのに、通行を妨げられて、少々いらいらしてしまう。しかし、今回は自転車の通行の安全を確保してくれる方であり、また、共に被災支援に携わっている仲間のように感じた。そして、はっとした。被災支援でなくても、道路補修の間に人々が安全に通行できるよう、大切な働きをしてくださっているのに、尊重していなかった自分を、恥じた。

到着すると、七郷の地域の代表者の方が挨拶される。その日は、大阪からやってきた天

理教のグループと一緒にになった。挨拶を交わしてから役割の振り分け（マッチング）。わたしは、Tさん宅の雑草処理に4人で取り組むことに。お家の方とも出会うことなく、グループの高校生、大学生、社会人若者と時折会話しながら、淡々と作業。それでも、普段の生活に戻るために、手が入っている植え込み・庭にすることで、Tさんが見てくれたらどんな思いになるだろうと「想像力」を働かせた。被災者と直接交わりを持つことがないことを残念に思ったのは確かだが、それがいいことで、気づく大切なこともあったわけだ。

◆ミーティングで、この日を最後に去るメンバーからシェアリング・リーダーが選ばれる。2名は、いずれもメンバーの中でも若い女性たち。でも勇気をもって自ら手を上げ、役を担った。いいやりとりがたくさんあったのに、わたし自身は疲れていて、詳細な記憶がない。外には出せないのだから、記しようもないのだが、自分として残念である。

ただ、この日は、夕食後の後片付けにも精を出した。YMCAの経験豊富な広瀬さんが、率先して、共同生活の中で大切な後片付けをされる。見習って、体を動かす。早く銭湯に行き、汚れた体と服の洗濯をしなければと気を揉みつつ。

宿泊先教会の礼拝に備えて、エマオから掃除道具を借り、われらが自転車部隊は、モップや箒を抱えて、仙台市中心街を走った。掃除道具を置いて、溜まった洗濯物を担いで、やっと銭湯に向かう。10時過ぎに教会に戻り、沖縄料理店で一息つく。

4日目 8月28日（日）

5時半に起きて、6時15分までに掃除、整理整頓という約束を守った後、7時半開始の早朝礼拝を宿泊先の仙台北三番町教会で共にする。説教は江連実牧師。教会の人とふれあうことで、宿泊先に親しみを覚えることができた。礼拝には、一緒に泊まっていた大学生たちも出席。彼らにとっては初めての教会での礼拝である。

ふと思い出したのは、新潟県中越地震の際、被災地でボランティア・センターとなった十日町教会（新井純牧師）での一コマだ。被災支援ボランティアには学生たちも多く訪れた。そんな中で、教会定例の夜の祈祷会が開かれる。ボランティアたちも参加した。翌夕、酪農学園大の（非キリスト者）学生が、新井さんに尋ねた、「今夜は、祈祷会はないんですか」。

新井さんは、彼らにとって祈祷会の持つ意味の大きいことを悟り、連夜、祈祷会を続けることにした。塚本潤一牧師（当時・高崎教会）がリードして賛美の時を持つことも……。こうして、十日町教会ボランティア・センターの、それは、名物となった。わたしは、このことを思いおこしつつ、併せて思った。教会の礼拝、祈祷会は、まさに日本風に言えば一期一会、主がそこにおられることを全身全霊を込めて伝えるものでなくてはならない、と。

北三番町の早朝礼拝を終え、同宿のうち3名は仙台北教会へ向かった。数十年前、仙台駅前から仙台市郊外の住宅街に転地した教会だ。教会前には公園もあり、コミュニティの中心といった風情。教会の看板を見ると、小西望牧師の説教ではなかったが、中に入ると

休暇中だと言う小西牧師もおられて、ほっとする。

◆礼拝 20 分前から礼拝堂に入り、前の方の席に着く。コンクリート製、合掌造りのような天井の高い三角の礼拝堂正面は、上から下までガラス（これは今回の地震で被災して修理は 7 月だった）、そこから背の高い細身の広葉樹が見える。下部はセメントの衝立があって気が散らない。その前に置かれた祭壇には聖書と三本のキャンドル（三本の十字架を思わせる）。15 分前くらいに、カトリック風に言えば、香部屋係がそこに火を灯す。

やわらかな光が降り注ぐ、礼拝開始前の時間は、なんとも穏やかで寛いだひと時であった。いつまでもこのままだいような。そこに突如、パイプオルガンが響きわたる。賛美歌は、よく響く会堂で、隣人の声とよく混じり合う。加藤保世教師の簡潔明瞭なメッセージも、礼拝の一部分としての役割を守り、聞くものを謙虚にさせる。祝祷後なされた、報告に先立ち、わたしたちボランティア一行の紹介がなされる。報告の最後に、諸集会のアピールに何人かが立たれたが、これも簡潔でユーモアに満ちていた。そして、後奏。

◆礼拝後、別室で昼のおにぎりをいただきながら、川端純四郎兄と歓談する。兄は、昨年、妻作詞の賛美歌「花彩る春を」の取材で今治教会の牧師館を訪ねてくださった。また、わたしの札幌北光教会副牧師時代の青年・N 君（現・東北学院中学教諭）が声をかけてくれたり、K さん（札幌北光教会・M さんの知人）とも話したりする。

午後からは、小西望牧師の案内で、被災地・七ヶ浜に立つ同教会の研修所ジレットハウスに向かう。小さな岬の上に立つハウス。岬の先端は打ち寄せた津波によって亀裂を生じ、ハウスへの門は流されている。それでも「奇跡的」（小西）に建物は残った。見下ろした浜辺には、打ち寄せられた大型コンテナがそのまま残っている。

その後、やはり津波に洗われた蒲生に向かう。その集落に立っていた単立の教会の跡地に十字架のモニュメントが立てられていた。その土台には教会の転居先が記されている。一株のマリーゴールドのオレンジ色の花が、精彩を放っていた。最後は、川を挟んで対岸の七郷地域を再び辿って、宿泊先まで送っていただいた。

道々、小西さんから東北教区としての被災支援の取り組みの様子を聞く。忙しかった片岡謁也さんなどは相当体を酷使し、体調を崩していたことも。それを聞きながら、ああ、休暇中の方を、こんな風に（結果的には）こきつかってしまったことに初めて気づいた。自分の鈍感さを恥じると共に、そこまでして案内してくださった小西さんの思いに答えていかねばと感じた。

◆教会に戻ると、柴田信也さんから連絡が入り、夕食を共にすることになった。小西さんお勧めの台湾料理店が、宿泊先のすぐ近くであり、合流するとそこへ繰り出し、絶品の料理に舌鼓を打った。柴田さんは、長田センターの働きのため東北を巡っておられたが、次の日から一泊二日でなされる東日本同信会（被災支援がテーマ）にゲスト参加の予定であった。新潟県中越地震を契機に生まれた新潟と神戸の関係の中で続けられた雪掘りツアーの常連である渡辺真一神学生（同志社・院）も同席してくれた。

5日目 8月29日(月)

ワークの最終日。石巻の作業の続きをと考えていた。七郷への自転車の苦しさもあった……。朝の打ち合わせに行くと、われわれの石巻行きはなさそうとのこと。一瞬、きついなと思ったが、またそこにも出会いや気付きがあるのではと気持ちを切り替えた。その後、リーダーのかなさんから、「かみしまさん、石巻に行っていただいていいですか」と声がかかる。拍子抜けしたような、実は恥ずかしくも喜んでしまって、「いいですよ」と答える。

一回目のように、三陸道の石巻港 IC を降りてすぐのコンビニで作業班の振り分け。今回は、前回と異なった奉仕先。前回一度お顔のみ拝見した F さん宅だと言う。住み続けることを断念して壊すことにした家から家財道具を搬出する（実は、搬出後残っている不要物を分別廃棄する）とのこと。

◆お宅に着くと、さっそく、すでに袋詰めした廃棄物を家から運び出す。ワークの始まりだ。しばし作業を続けていたら、阿部さんの妹さんが「炊き込みご飯」を持って問安してくださった。

それからしばらくして、F さんが来られる。「この家は、継ぎ足し継ぎ足しして建て増しているが、一番古い部分は祖父母の代からのもので、元あった場所から、ころで引っ張ってきた」と F さん。「当時は合せて二軒ばかりしか家はなく、周りは田んぼや畑で、すぐわきにある線路際の道もなく、人々は線路沿いに往来していた。ドジョウ（小ぶりなものがおいしい）を捕って卵とじにして食べた。おーいしかったよ」。

家のことについても話された。「この床には何があったと思う」と言われる部屋は、皆が炉を囲んでいた。上からは自在鍵が吊るされ、家族のだんらんがあった。「母親をここで見送ったんだよ」と言われる部屋は、神棚のある部屋。「今年は七回忌だったけどさ、こんなことでやってやれなかった。来年だな」「墓は、こんな具合に倒れてしまった。住職に直してもらうように頼んだ」。

それまで、ただ倒すだけの家だと思っていた。だから、重い畳がすでに運び出された後の板張りの床に、紙・プラスチック・ガラス、種々雑多なものが散乱しているのを、どこまできれいにしたらいいのかと判断に迷っていた。しかし、F さんのお話を聞きながら、完全にではなくても心を込めて散乱物を取り除かねばと思った。

お話の最後の方で、被災体験を語り始められた。「ここまでは水はこねえと思ってたんだども、きたな。誰も知らせてくれなかった。隣の人が水が出たことを言ってくれた時には、とっつあまと俺は流されていた。なんとか向こうの線路の先の家につかまったけど、また流されて足を切って、手のここんところも切って、それでもなんとかとっつあまを助けた。破傷風になるかとおもったけどそれは大丈夫だったな。ここら辺でも数人が死んでしまった。」

近く、解体されると言う F さんとお父さんのお家。改修するより解体して建て替えた方がいいと分かっているけど、最後まで解体を躊躇された思いに共感しながら、ワークを終え

た。ワークというよりお話に耳を傾けた一日。テンポの速い東北弁は70パーセント程しか理解できず、精確に聴き取れていないが、去りがたい思いを持ちつつ撤収した。

◆エマオはこの月曜から石巻の拠点を本格始動することになっていた。その日から入った若者たちが、ワーク終了後、早速、拠点の家に向かう。そんなこともあって、いつもより仙台に帰るのが遅くなった石巻班。17時ころ石巻を離れ、渋滞に巻き込まれながら19時ころエマオに戻った。その道を、やさしい夕暮れが包んでくれた。

6日目 8月30日(火)

帰りの空港待合で、たまたま、仙台で行われていたキリスト教学校教育同盟の会議に参加されていた北星学園大学の山我哲雄教授(旧約学)と一緒にになった。十数年ぶりの再会だった。たまたま席まで隣り合わせ。北星学園大学でも、仮設住宅の暮らしのお手伝いのために継続的に学生を送っていると聞いた。かつて学園スタッフの一員であったわたしは、それを嬉しく聞いた。

実は、最終日にも少し欲張った旅程を考えていたが、それは、断念した。疲れということもあったが、それ以上に、消化しきれないほどたくさんのものをもらったからだ。それを思い起こし、書き記して、生かさねばならない。そんな思いで、書き記してきたが、一度筆をおいて、また、見直していきたい。(2011年9月5日未完)